

平成28年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：平成28年4月～平成29年3月

1. 学校概要

学校名 大田区立大森第六中学校
 種 別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 中高一貫教育 高等学校
 教員養成 技術/職業教育
 特別支援学校 その他 ()
 所在地 〒145-0063
 大田区南千束1-33-1
 E-mail om6-j03@educet01.plala.or.jp
 Website http://academic3.plala.or.jp/om6j/
 児童生徒数 男子 218名 女子 170名 合計 388名
 児童・生徒の年齢 13歳～15歳

2. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
 国際理解
 世界遺産
 平和・人権
 環境
 気候変動
 生物多様性
 エネルギー
 防災
 食育
 伝統文化
 そのほか ()

3. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

学習指導要領の実施を踏まえた、学校全体での教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究

・E S Dを学校全体で体系的に推進するために、各教科等の連携により、持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし、それらを解決するために必要な能力や態度を児童生徒に身に付けさせるための教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究

研究結果のポイント

- 全教員が教科を横断して3つの分科会「思考力」、「コミュニケーション」、「E S Dの態度」に所属した研究による授業改善。体験活動中心型から授業中心型への研究の転換
- E S Dで身に付けさせたい力や態度についての生徒意識調査（平成27年5月及び平成28年5月）では、全20項目中、他者、集団、社会とのつながりを問うた4項目で特徴的な変化が見られた。
- E S Dで身に付けさせたい力や態度を、全教科に組み込んだE S Dカレンダーの作成・修正
- アクティブ・ラーニングを取り入れた授業改善による生徒や教師の意識の変容
- E S Dの成果を評価する方法として、ポートフォリオ及び「六中ループリック」の開発生徒の活動、教師の活動、地域の活動がいずれも活性化

1 研究主題等

(1) 研究主題

E S Dの推進及び授業改善

(2) 研究主題設定の理由

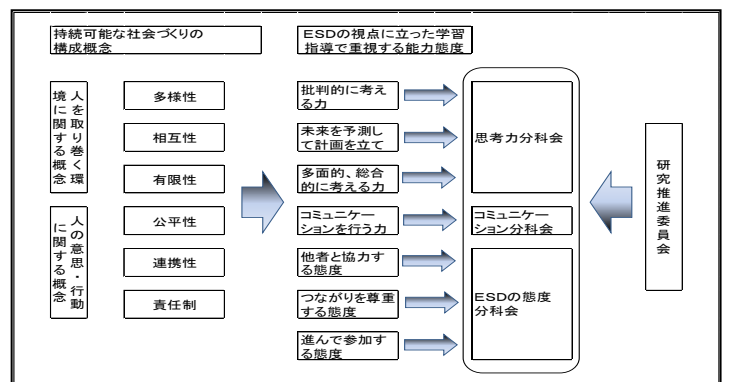
本校のE S Dは、平成22年度のユネスコスクールへの加盟前後に始まった。洗足池等が隣接する恵まれた条件を生かした環境教育が端緒となり、E S Dは地域連携を基盤として少しずつ広がりを見せる。平成22・23年度の2年間は区の指定を受け「夢と希望を与える課題解決能力の育成～地域の学びから世界の学びへ～」をテーマとして研究を進めた。こうした中、東北に発生した大震災により、国全体が危機状況の中で、持続可能な社会の構築の重要性が改めて深く認識されることになる。

研究は、防災教育、国際理解教育、生命教育へとつながっていく。この頃からE S Dで付けたい力（国立教育政策研究所が7点例示）の育成が意識される。平成24・25年度は自主的に研究を継続し、平成26・27年度に再び区の研究指定を受けるにあたって、また平成27・28年度に国立教育政策研究所の研究指定を受けるにあたって、これまでの「総合的な学習の時間」や「特別活動」での実践はもとより、授業を中心とした全教科での横断型の取り組みによりE S Dを一層推進することにより、E S Dで身に付けさせたい能力・態度の確実な育成が図られ、次世代を担う人材育成につながると考え本主題を設定した。

(3) 研究体制

① 校内研究組織は右図のとおり。

② 本校の研究は、多くの関係者の協力をいただいている。PTA、学校支援地域本部、地域、各企業、大学、NPO、区、都、文部科学省、国立教育政策研究所、国内外ユネスコスクール、海外関連機関等から専門的な指導から事務手続きや、様々な作業に至るまで全面的なご協力をいただいている。こうした連携も本校における研究組織である。



(4) 主な取組

平成 28 年度	◆28.4 新体制組織づくり，研修会① 研究推進委員会，各分科会を構成，各教職員の役割分担と，意識の確認
	◆28.5 生徒意識調査実施 E S Dで身に付けさせたい力や態度について生活における意識，学習に臨む意識を調査
	◆28.5 研究授業・研修会② 講師 成田喜一郎氏（東京学芸大学）
	◆28.6 研究授業・研修会③ 講師 成田喜一郎氏（東京学芸大学）
	◆28.7 研究授業・研修会④ 講師 成田喜一郎氏（東京学芸大学）
	◆28.9 研究授業・研修会⑤ 講師 田村 学氏（視学官）
	◆28.9 研究協議・研修会⑥ 講師 成田喜一郎氏（東京学芸大学）
	◆28.10 研究協議・研修会⑦ 講師 成田喜一郎氏（東京学芸大学）
	◆28.11.18 研究発表会（国研教育課程研究指定最終） 「E S Dの推進及び授業改善」を主題とした研究発表会を実施，成果と今後の課題を確認
	◆28.11 研究発表の反省及び今後の方針
	◆28.12 ユネスコスクール全国大会「E S Dの目標」分科会発表
	◆29.1 最終発表会の準備
	◆29.2 国立教育政策研究所 E S D教育課程 最終発表会，まとめ
	※ 研究授業は分科会ごとの観点から展開し，全員で課題を確認（各教員各年1回） ※ 特別活動，ボランティア活動，部活動等における活動は常時実施

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

ア 授業改善への取り組み／評価方法の整備／E S Dと教科とのつながり

今回の研究では授業改善を最重要課題とした。E S Dで身に付けさせたい力や態度について，27年度の研究開始時に教員アンケートをとり，協議を行い，E S Dで身に付けさせたい力（国立教育政策研究所が7点例示）を集約して3つに分類し，3つの分科会が分類された課題を担当した。分科会は「思考力分科会」，「コミュニケーション分科会」，「E S Dの態度」の3つ。各教員が各年度に各1回の提案・実験授業を行い，分科会単位または全体会で分析や，改善のための提案等を行うとともに講師等による指導を受け授業改善を行った。

28年度は，E S Dで伸ばしたい7つの力と態度をさらに細分化し，9つの能力と態度をループリック化（図1-13）して教室掲示するとともに，単元終了時等に生徒が自己評価を行い，教員はそれを集約して授業改善のための資料として活用した。また授業改善にはポートフォリオも活用した。

イ 授業以外の取り組み／E S Dとさまざまなつながり

研究以前の取り組みに加え，新たな実践を始めた。「人とのつながり」，「命とのつながり」，「環境とのつながり」，「地域とのつながり」，「世界とのつながり」，「国内とのつながり」等，「つながり」をキーワードに進めた。

(2) 具体的な研究活動

ア 授業改善への取り組み／評価方法の整備／E S Dと教科とのつながり

▽ 「思考力分科会」では，「批判的に考える力」を「解決方法が一つではないことを意識し，協働してよりよい解決策を見出していく力」，「未来像を予想して計画を立てる力」を「より良い未来像を共有し，その実現のために必要なスキルやステップを考え実行していく力」，「多面的，総合的に考える力」を「情報共有をしながら，互いの考えの共通点や，相違点を理解し，共感・統合により課題を解決する力」と規定した。授業では，伸ばす力を明確にし，アクティブ・ラーニングを積極的に取り入れ，最適の授業形態を研究し，常時E S Dで重視する態度（他者との協働，つながりの尊重，主体的な参加）を意識し，生徒が主体的に学ぶ授業づくりを行った。

例えば「わかりやすく伝えるための工夫を考える」（国語）で，観点を立ててマッピングを行い，構成表や構成メモを作成し，グループ協議を通して，互いの意見を参考に構成メモを修正することで，わかりやすく伝えるための工夫が考案され実践される過程を体験させるなどした。

▽ 「コミュニケーション分科会」では，自分の考え等を持つ「発想力」，根拠をふまえて適切に伝える「論理力」，相手の主張を聞き取る「聞く力」，相手の意見から自分の意見を構築する「批判的思考力」，前述4つの力を効果的に発揮できる「コミュニケーションを行う力」を研究した。

例えば「大田区活性化プロジェクト」（社会）では，班毎にまとめた根拠をもとに寸劇によるプレゼンテーションを行った。自らの立場では想定しなかった意見や考え方に接することで視野が広がるとともに，効果的なコミュニケーションから解決の糸口を模索する授業等を行った。

▽ 「態度分科会」では、ESDにおいては「他者と協力する態度」、「つながりを尊重する態度」、「進んで参加する態度」を重視し、そのような資質を育成することが問題解決能力につながると考えた。また求める生徒像を、異文化を拒まない、命を大切にする、積極的に関わるとした。「主体的・対話的で深い学び」を進めるために、認知的に不均衡な状態を引き起こす問を、特に各単元や各授業の「導入」において与えることが重要と考え実践した。

例えば「無性生殖と有性生殖、どちらが生き残る」（理科）では、ディベート方式で根拠を示しながら討論を行い、多面的な考え方や批判的な考え方を養う授業等を行った。

▽ 今回の研究では、授業改善や効果検証を進めるため「ポートフォリオ」を活用し、また「六中ルーブリック」（評価指標）を作成した。ESDの評価にあたり、「学力の氷山モデル」（梶田1994）で指摘された「見えにくい学力」（思考力・判断力・表現力、関心・意欲・態度）を可視化するための対応である。これらのESDの評価の実施は、生徒及び教師の変容を促し、教師は生徒の自発的な学習を引き出す「ファシリテーター」になるべく意識を変えた。六中ESDルーブリックは、全教科の教員が研修で何度も検討を重ねて作成した。各教科で単元ごと、または学期ごとに使用し、チャート化した結果を蓄積し、生徒が自らの学習を振り返り、教師が指導改善を行うための資料とした。

イ 授業以外の取り組み／ESDとさまざまなつながり

▽ 「人とのつながり」では、ボランティア活動として、まず本校のボランティア団体「農援隊」による、平成24年から継続中（毎月1回実施）の「大岡山駅前花壇メンテナンス」がある。大岡山北口商店街振興組合、NPO法人、東工大ボランティア、区のまちなみ維持課、地域住民等と協働している。「エコキャップ運動」では、地域小学校・商店街・住民の協力を得て、活動9年目である。「落ち葉掃きボランティア」は10月下旬から12月中旬まで毎朝校庭等の落ち葉掃きを行い、最終日には地域小学生、住民を招待して焼き芋大会を行う。

「学校生活改善のための活動」として、小中連携で「あいさつ月間」を決め、ポスターを作成し小中4校が同時に行う「あいさつ運動」、特別清掃と、修繕等をPTAや卒業生の協力も得て行う「校内キレイキレイ活動」、大岡山北口商店街の「東北エイド」等に参加しての、東日本大震災の被災地への募金活動がある。募金をしていただいた方には、生徒たち手作りのスイーツ「勝チョコクッキー」をお礼として差し上げる。

▽ 「命とのつながり」では、校庭敷地内から防空壕が発見され、保存工事が完了した（平成26年）11月12日を「平和の日」と定め、26年には、広島市長から「被爆アオギリ2世」が寄贈され、27年には生徒会「平和学習委員会」の発案で全校生徒で「平和の詩」を作詞、音楽科が作曲をして「平和の歌」が完成し、「平和の日」などに全校合唱を行っている。平成19年以降、毎年3学年次に普通救命講習を実施、これまで延べ1300名以上が技能認定証を授与された。

▽ 「環境とのつながり」では、平成22年から「公益社団法人洗足風致協会」、「横浜ホテルの会」、「NPO印旛沼いかだの会」等の協力を得て、洗足池では昭和初期に姿を消したホテルを水質調査・改善、幼虫飼育・放流等により自生・復活を目指す「ホテル復活プロジェクト」、エネルギー対策のための「グリーンカーテン設置」、「腐葉土づくり」等を行っている。

▽ 「地域とのつながり」では、10自治会、2消防団、消防署、区防災課等と協力して「避難所開設」、「傷病者搬送」、「炊き出し」、「災害対策電話設置」、「消火訓練」等を行う「学校防災訓練」を平成22年度以降毎年5月に実施。また地域住民等と地域の危険箇所や防災資源等を点検する「まちなか点検」や地域3小学校と施設分離型でテーマを「効果的な交流と接続を図る」とし、各教科で研究授業、部活動、生徒会等の交流を行う「小中一貫教育」等を実施している。また小中学生洗足池自然講習会も毎年実施している。

▽ 「世界とのつながり」では、中国招聘プログラム、韓国招聘プログラム、日米交流プログラム等への教員参加、国際フードプロジェクトではインド、インドネシア、タイ、国内等の学校とスカイプ等での交流、子供服を難民に送る活動に参加、毎月2回担当教師（全教師持回り）により新聞記事を紹介し、全生徒が意見や感想を書く「世界のトピックス」等を行っている。

▽ 「国内とのつながり」では、南三陸町への継続支援、視察訪問、南三陸町立志津川中学校職員による、本校での「ユネスコ講演会」、愛知県豊田私立藤岡南中学校との生徒交流会等がある。

(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施（本校では、ユネスコ委員会）
- その他（